

流産・死産 心のケア普及 岡山大・中塚幹也教授に聞く

「一人一人接し方考えて」

10月9～15日は死産や流産で亡くなった赤ちゃんを思う国際的な啓発週間だったが、当事者に対する社会の支援体制は十分整っていない。岡山大病院(岡山市)で医師や看護師向けに対応の手引動画を作成するなど、グリーフ(悲嘆)ケアの普及に取り組む同大学院保健学研究科の中塚幹也教授(60)に、どのようなケアが求められるのか聞いた。



ウエブ会議システムZoom(ズーム)で取材に応じる岡山大大学院保健学研究科の中塚幹也教授

【聞き手・西本紗保美】

——岡山大病院には流産・死産を経験した母親らのための「不妊・不育とこころの相談室」があります。

◆この病院には流産・死産や新生児死亡を2回以上繰り返す不育症の専門外来が30年前からあります。相談室は岡山県の委託を受け、岡山大大学院保健学研究科が2004年に開設しました。医師による不妊・不育症の治療の相談だけでなく、流産・死産で直面する喪失感やつらさ

を、不妊カウンセリングや臨床心理士らがケアする体制を整えています。対面や電話のほか、コロナ禍でオンライン相談も始めました。

——死産の経験者の中には「赤ちゃんを入れるひつぎ代わりに『靴の箱』を病院のス

タッフから提案されて傷ついた」という人もいます。医療現場では、当事者に寄り添った対応は難しいのでしょうか。

◆助産師や看護師の中には「どう言葉を掛けていいかわからない」と話す人もいます。医療スタッフ向けのグリーフケアの手引動画

をネット上で公開しています。死産児との対面では「妊娠週数が早い場合でも一人の人間として接する」「赤ちゃんを大切に医療者の気持ちや両親を癒やすことにつながる」と紹介しました。一人一人が接し方を考えることが大切です。亡くなった赤ちゃんに「会いたくない」と対面を拒絶する人もいます。

はハードルが高いという指摘もあります。◆私たちの元を訪れる患者の2～3割はうつ状態に陥っています。そのような状態です。周囲から「また次の妊娠に向けて頑張ってください」と言われると、当事者は深く傷ついてしまいます。「こころの相談室」の連絡先を記したパンフレットを17年か作成し、県内の産科

施設に配布しています。退院後、つらさが募ってきた頃に見返してもらって支援につなげる狙いです。

◆高年齢出産の場合、リスクとなる染色体異常などの確率が上がりますが、専門外来などで不妊や不育症の因子を探ることができれば、次の妊娠への不安を減らすことも可能です。不妊や不育症には、医学的なケアと精神面のケアの両輪が不可欠です。

◆高年齢出産の場合、リスクとなる染色体異常

医療者向け手引動画作成

岡山大病院「不妊・不育とこころの相談室」の開所時間は毎週月・水・金の午後1～5時、毎月第1土・日曜日の午前10時～午後1時。予約は086・235・6542へ。

香川県の不妊・不育症相談センター(高松市国分寺町)では看護師が平日午前10時～午後4時に対応。医師や心理カウンセラーとの面談も可能で予約は087・816・1085へ。各都道府県に相談窓口がある。